

昭和二十四年

家計不如意うる山あたり春時雨

読み〓かけいふによい うるやまあたり はるしぐれ

季語〓春時雨(春)

《この一月一日から一般にも日の丸を掲げる事がGHQから許可されたのであるが格別の感慨は無かったようで、その事を詠んだ句は無い。俳句も正月の季の句は無く、春から始まる。》

また困窮の句である。山林は田畑と違って農地解放の対象にならなかったで、売って金にする事が出来た。といって、志村家が広大な山林を持っていたという訳ではないので、その辺の端山にある櫟や松の林を切り売りをしたのである。ここでいう山とは甲州方言で、林ないし小さな森くらいの意味で、大きな山岳を思ってはならない。

渡る日に雲は白妙下萌ゆる

読み〓わたるひに くもはしろたへ したもゆる

季語〓萌ゆる〓草萌え(春)

これはまた麗らかな春の日である。

藪影に夕陽しづもる春の水

読み〓やぶかげに ゆうひしづもる はるのみず

季語〓春の水(春)

しづもる〓鎮もる。

麗らかな春の日が暮れていく。

へらくと冴えかえる夜の爐火澄める

読み〓へらへらと さえかえるよの ろびすめる

季語〓冴えかえる(春)

良知誕生の時、大火を焚いた囲炉裏の火であろう。

冴えかえる夜、とは春になったのに妙に冷える夜という意味。囲炉裏の火を「へらへら」と表現したあたり、寒さの中にも春を感じてなかなかである。

茎立つや荒ぶ日がちの天気ぐせ

読み〓くきたつや すさぶひがちの てんきぐせ

季語〓茎立ち(春)

一見難解であるが、素直に読めばなんとなく解る。

木の芽が伸び始め、草も双葉から茎を伸ばすようになる晩春には、風雨とも強い荒れる日がある。典型的には、前線を伴う低気圧が日本海を東進する時で、関東地方では強い南風と風雨で台風のような様相になる。

低気圧一発で済めば良いが、それが連続してやってくると、荒ぶ「日がち」となる。日がちということばはあまり一般的ではないが、黙榮はそういうことは全然気にしない。

祭り了う暮れかねる日がまだ芝に

読み〓まつりしまう くれかねるひが まだしばに

季語〓暮れかね (春)

祭りの日が暮れかかって仕舞わなければ、という状況の句は他にもある。春の日永が感じられる。

農村のお祭りは春祭りが多い。秋の陽気の良い時期はまだ忙しいし、農作業が終わった農閑期迄待つと、もう冬で寒すぎる。三月半ばから四月一杯くらいが祭りの時期として丁度良い。何より、秋に豊作を感謝、というより、春に今年の農作業の安寧と豊作を願う方が、祈る方の感覚として自然である。神社仏閣でひたすら感謝と云う感覚はかなり近代的思想だと思っ

フランスのワイン産地のアルザスでもワイン祭りというのが、各村ごとに盛大に催されたが、夏の終わりの葡萄の収穫を前にした時期に集中していた。これも良いワインが出来ますように、という祈願のお祭りであるからであろう。

長男入学

胸札の墨痕淋漓たり入学児

読み〓むなふだの ぼっこんりんりたり にゅうがくじ

季語〓入学 (夏)

これは良い句である。とかく三文安になりやすい我が子の入学を詠んで堂々としている。中七の字余りも気にならず、逆に効果的である。

墨痕淋漓の胸札を書いたのは榮助自身であったのあろう。

丹精す入学の子の後ろかげ

読み〓たんせいす にゅうがくのこの うしろかげ

季語〓入学 (春)

一転、三文安の厨房句である。「親父、こりゃあ、月並みだねえ」位は言つてやりたい。



春曉や音をはばかり厨妻

読み||しゅんぎようや おとをはばかり くりやづま

季語||春曉(春)

養蚕を家の中で行うのが前提の家である。厨での音をはばかりないと家じゅう起きてしまうほど小さな家ではないけれど。

立てるより乾く畝土南風強し

読み||たてるより かわくうねつち はえつよし

季語||南風(夏)

春一番かそれに類する春先の強い南風の中での農作業。

日本海の低気圧に太平洋気団から暖かい空気が吹き込むので、気温は上がり、畝立てをしているとこういう情景になるのである。

雨ぬくく端山雪解の雲まとう

読み||あめぬくく はやまゆきどけの くもまとう

季語||雪解(春)

西山の風景である。

四月八日 野之瀬妙了寺炎上

《野之瀬は昭和十四年から数年間教職でいた事がある、甲府の西側の山の村である。妙了寺境内は野之瀬尋常小学校に隣接しているので榮助にはなじみ深い寺であった。》

春の北風遠き大火の煙みゆ

読み||はるのきた とおきたいかの けむりみゆ

季語||春(春)

四月八日、妙了寺祭礼の花火から出た火は、折からの強い北風に煽られて燃え広がり、野之瀬村の家約百戸を焼く大火となった。

野之瀬まで直線で二十五キロ余り、南が開けた場所からなら煙が見えたであろう。榮助には、あれは野之瀬の方向だと判ったかもしれない。それにしても凄い煙、大火事だ。知り合いも大勢いた事であろうから心配だったであろう。速報を知る手段も無い当時、後で野之瀬だったとはっきりしたのである。

行く春の風雨の中に時計鳴る

読み||ゆくはるのふううのなかに とけいなる

季語||行く春(春)

作業中なら耳が遠い榮助には時計の音は聞こえないので、榮助は家の中、それも囲炉裏端で風雨に様子を伺っての事であろう。こんな些細な事をきれいな春の句にまとめる技量に改めて驚く。

春耕や三竿の日に心足り

読みⅡしゅんこうや さんかんのひに ころろたり

季語Ⅱ麦耕(春)

三竿の日とは、竿三本分もあるほど高い、という意味から天高くに上がっている太陽を指す。南の空にあった太陽が戻って来て、暖かい日差しがなかで、おそらく何かの種を播くか苗を植える為に畑を耕している。百姓として幸福を感じずる時間であろう。

夏時間というもの制定さる

《夏時間は前年の昭和二十三年から実施された。夏の間、時計を一時間進める事で夕方の明るい時間を長く使う、という工夫である。アメリカとヨーロッパでは今でも行っている。その時期が欧・米で事なっているのは貿易などで欧米を相手に仕事をする実務者にとつては甚だ迷惑である。

緯度が高く、夕方涼しいヨーロッパでは夏時間の威力は絶大で、仕事が終わってから、涼しい中でゴルフをワンラウンドし、まだ明るい戶外テールでビールを飲んで、明るい道を運転して帰れる、と言われている(ただし、飲酒運転を厳密に禁止している国ではビールは駄目だが)。

日本では、緯度が低い為に夏とはいえず夕方がそれ程長くないこと、夕方になっても外は暑く、屋外で活動は出来ないこと、などから夏時間を採用してもあまり意味が無いと私は思う。》

夏時間八時ぼうたんまだ暮れず

読みⅡなつじかん はちじぼうたん まだくれず

季語Ⅱ夏時間(夏)

昭和二十四年の夏時間は四月三日から九月十日まで実施された。

夏時間八時は、標準時間七時である。ぼうたんは牡丹の花の事。牡丹の花の季節、例えば、四月二十日頃の日没は夏時間なら七時半頃である。従って八時なら日没後三十分であるから、まだ明るいかもしれない。

夏時間という新規なる物への好奇心の表現が、牡丹の花と云うのはいかにも俳人である。

泰元はじめての遠足

花菜萸の朝光に待つ遠足児

読みⅡはなぐみの ちようこうにまつ えんそくじ

季語Ⅱ花菜萸(春)

門先には菜萸の木はなかったもので、どこかの菜萸と遠足児の姿を句の上で組合わせたのであろう。菜萸の花は、銀色の産毛のある葉の中に咲く薄黄色の地味な花である。

養蚕組合で上諏訪に遊ぶ

信濃路や早き苗代緋桃咲く

読みⅡしなのじや はやきなわしろ ひももさく

季語Ⅱ麦秋(夏)、桃(春) Ⅱ季重ね

養蚕組合とは、坂井の養蚕農家の組合で、稚蚕の共同飼育、繭の共同出荷、病虫害や晩霜被害の共済、養蚕技術向上のための研修などを行った。後には、その養蚕技術は優秀であるとして県内外から研修生を受け入れたりもした。

親睦の為の旅行は年何回か、葦崎での映画見物から、金毘羅さんや九州迄も行く遠走りまであって皆の楽しみだった。ゆりは忙しい盛りの夜、養蚕組合で葦崎に『喜びも悲しみも幾年月』を見に行つて皆で泣いた話を良くしてくれた。

五月末か六月初めの信州の田植への苗代の準備は、おそらくまだ寒い四月初め頃から始まるのであろう。藤井田圃の遅い田植え準備から見ればとてつもなく早く見えたに違いない。「おい、ありあ苗間（ねえま）の仕度すら、へえねえまだど、はへえもんじゃんかい」。

朝雨に青き棟芝四月盡

読み||あさあめに あおきむなしば しがつつく

季語||四月盡(春)

棟芝(芝棟)は、藁ぶき屋根の棟の部分に防水強化の為に土を上げ、そこに芝草など根を張る草を植えたもの。

昭和二十五年の改装では母屋の改装部分以外は手を触れず残されたので、私知っている母屋に於いても、藁ぶき屋根の棟の部分には岩松が並べられていた。岩松は乾燥すると裏が白い葉を開けてしまうが、雨に濡れると葉を開き青々と見える。

四月盡麦の朝風光みつ

読み||しがつつく むぎのあさかぜ ひかりみつ

季語||四月盡(春)

青い麦畑は榮助の好きな景色の一つである。実際穂を出す頃の麦畑というのは実にきれいで、そこに朝日が射し、そよ風が吹いていたりしたらたまらない。

おぼろ夜や寄れば愛馬の鼻鳴らす

読み||おぼろやや よればあいばの はなならず

季語||おぼろ夜(春)

榮助は、牛、緬羊、山羊を飼ったが、馬は飼っていなかった。馬は二軒西の五味正雄氏が飼っていた。この馬の記憶は私にもあり、馬小屋は玄関の外すぐ脇にあつて、そう言われれば馬はいつも鼻を鳴らしていた。「その馬はくつつく(噛みつく)からそばへよっちょよし」と言われた。ある時、この馬が田んぼ脇に繋がれ猛烈な勢いでいなないていた事がある。「ひひーん」という物の本に出てくるような典型的な馬のいななきであった。

軒端よりたたむ山々辛夷咲く

読み||のきはより たたむやまやま こぶしさく

季語||辛夷(春)

この辛夷の花は近くにあるのか、遠くにあるのか。泰元に確認してもこの頃辛夷の木が屋敷内にあつたという記憶は無いという。

南風立ちてキャベツ玉づく水の照り

読み||はえたちて きやべつたまづく みずのてり

季語||南風(夏)

晩年の榮助は、自称白菜作りの名人であった。泥をこねて苗床を作って種を播くところから丹精こめて作った白菜は確かに名品で、虫も好むため見かけは悪かったが、浅漬けにしての白い所の味は抜群であった。都会育ちの孫たちの目の前で、一緒に漬物にされた青虫を食って見せた時は泣いて嫌われ、しばらく寄りついてもらえなかった。

この句はキャベツである。晩年は特別大仕掛けにはキャベツは作らなかつたが、キャベツ作りの技術はあり、どこかに十個や二十個は作っていたかもしれない。結球し始めた若いキャベツに露が結ばれているのであろうか。

庭つきの麦は穂に立ち春暮るゝ

読みⅡにわつきの むぎはほにたち はるくるる

季語Ⅱ春暮る(春)、穂麦(夏)

季節が違ふ季節が重ねて使われているが、黙栄はこと百姓の立場になるとそういう事はあまり気にしない。

「庭つき」は「庭尽き」で、庭が尽きるところからの畑の意味であろう。

『隣屋敷』と呼んだ家の並びの畑は母屋の東側の庭と並んでおり、そこは麦やといもろこし、野菜を作ったのでその風景と思われる。

次も麦の句であるが、この季節黙栄が作句の対象として、ことのほか好んだのが麦と苺である。

甲斐駒の肩に入日が麦穂立つ

読みⅡかいこまの かたにいりひが ほむぎたつ

季語Ⅱ穂麦(夏)

坂井での養蚕最盛期は昭和三十年代で、家の近所の畑という畑は悉く桑畑になったが、昭和二十年代には、まだ麦畑、即ちユートイリテイに富んだ畑もあった。榮助の畑でこういう風景が見えたのは、馬伏場(うまあせば)という名前の畑である。この季節の入りが甲斐駒ヶ岳の方にまで届く(北に行く)かどうか見た記憶は無いが、流石の(ほら吹き榮助こと)黙栄も、ここで風景の創造はないであろう。

泰元に尋ねたら、まさに麦穂立つ季節に馬伏場に行つて確認してくれた。

「この句の通りの光景であった」と云う返事が来た。夏至の頃には甲斐駒よりかなり北に行くとのことである。

馬伏場(うまあせば)とは畑の名前にしては凄すぎる。昔の家畜の屠殺場でもあったのであろうか。

労働祭人民広場花了る

読みⅡろうどうさい じんみんひろば はなおわる

季語Ⅱ労働祭(夏)

人民広場とは皇居前広場の事と思われる。共産党による人民広場事件は翌昭和二十五年のメーデーの事であるが、昭和二十四年時点でも皇居前広場を人民広場と呼ぶ呼び方もあったのであろう。

片倉温泉に遊ぶ

風吹けば噴水が散るベンチ去る

読みⅡかぜふけば ふんすいがちる べんちさる

季語Ⅱ噴水(夏)

葦崎にも工場があった片倉製糸は、世界遺産富岡製糸所を会社経費で保存してきた事で一躍有名になった。

片倉温泉とは、上諏訪温泉の片倉館のことであろう。昭和初期に出来た豪華な温泉リゾートで、葦崎工場について、この句集にも二句の工場見学句のある片倉製糸のゆかりの施設である。

これも養蚕組合の旅行であろう。

高窓に湧湯の研春盡くる

読みⅡたかまどに わきゆのこだま はつつくる

季語Ⅱ春尽く(春)

片倉館は西洋館であるから高窓はその建物の西洋風の窓を言っているの
であろう。

暮れ遅き空へサイレン野球了う

読み〓くれおそき そらへさいれん やきゅうおう

季語〓暮れ遅し(春)

どこの風景なのか判りかねる。榮助は野球が時に好きではなかった。

大柴千鶴子先生家庭訪問

乙鳥とぶ庭女教師が訪問す

読み〓つばめとぶ にわおんなきょうしが ほうもんす

季語〓乙鳥(春)

小学校に入学した泰元の受け持ちの先生の家庭訪問である。大柴先生は、小学校を隔てた反対方向にある絵見堂(えみどう)という変わった地名の集落の住人だった。私は大柴先生とは縁無かったが、私の小学校時代も先生として在籍しておられた。

げんげ田に蜂飼うたつき春くるる

読み〓げんげたに はちかうたつき(生活) はるくるる

季語〓春暮る(春)

蜜蜂を連れての蜂飼いが巡回してきたのであろうか。

子供の頃、沢山の蜜蜂が飛んでいたような記憶がある。刺激しなければ人を襲う事は無いので、スイカズラの蜜などは蜜蜂と競合して吸ったものである。

初夏の雲恋うホップ縄を攀ぶ

読み〓はつなつの くもこうほつぷ なわをよづ

季語〓初夏(夏)

良い句である。「雲恋う」という表現がホップを良く表している。確かキリンビール委託であったか、ホップ畑というのがあちこちに散在していた時期があった。高さ五メートルもあるうかという棚を組み、縄を垂らして攀じ登らせる。従ってホップ畑というのは遠くから見ても特徴がある。

アルザスの北の方、ドイツとの国境に近い辺りには大規模なホップ畑が広がっていた、アルザスはフランスのビールの殆ど全部を産する大ビール産地でもある。

平賀光照氏庭

大でまりこの静かなる黄昏を

読み〓おおでまり このしずかなる たそがれを

季語〓おおでまり(夏)

黙榮ワールドである。おおでまりという純白の華やかなれど落ち着いた花が目につかぶ。

句集「榎陰」に親しむ前から知っていた黙榮句で、大でまりを見るとこの句を思い出す。榮助も大でまりが好きだったと見えて、家の前に一本植えていた。何でも巨木の榮助の敷地であるが、この大でまりはあまり大きくなかった。

庭薄暮初眠の蚕座かわく香に

読みⅡにわはくぼ しよみんのさんぎ かわく香に

季語Ⅱ蚕(春)

初眠の蚕というのは五ミリ位の黒い毛虫である。蚕は大きくなると体毛の存在は判らなくなるが、初齢、初眠の蚕は結構毛深い。春蚕の初齢初眠はかなり強い暖房が必要で、この時代には練炭火鉢か、移動式の爐(室内で焚火をする道具)を使ったであろう。

蚕座が乾く香、というのは私には当然判る。眠に入った蚕には、消毒と乾燥のために消石灰を振りかける。その石灰と桑の葉の香りが混じった独特の香りである。

乙黒田中本家

菓子胡桃とどのう葉蔭乳牛臥す

読みⅡかしくるみ とどのうはかげ ちうしふす

季語Ⅱ麦秋(夏)、月(秋)Ⅱ季違

菓子胡桃とは、栽培用の大粒の胡桃のことである。ここでは胡桃の実の事では無く、胡桃の木のことを詠んでいるが、その木は庭にあるのである。乳牛は大牧場に放たれているのではない。

ゆりの実家は中巨摩郡玉穂村乙黒。笛吹川右岸で、甲府盆地のほぼ真ん中、今も昔も甲州随一の稲作地帯である。ゆりの実家は新家と呼ばれる分家で、近所に大家と呼ばれる田中本家があった。ゆりの実父栄は田中本家から新家の長女みつに婿入りして来た人である。

田中一族は、戒名の院号は本家のみが使い、分家は新家以下許されない、女は紋付に正規の家紋は許されず裏紋を使う、など、信じられないような伝説を現在に至るまで墨守している。

栄助がゆりの実家に行った折、本家を訪問したものである。当時の当主は栄助の甲府中学の一、二年先輩であった。本家でも新家でも十頭余りの乳牛を飼っていた。子供の頃ゆりの実家に遊びに行くのは、年が近い従兄弟妹がいたので楽しみであったが、三度の食事とその合間に新鮮と称する牛乳を大量に飲まされるのは閉口であった。

ゆりの弟である新家の当主松彦は盛岡高等農林学校出のプロの牛飼いで、農耕馬使いであった。

登校の子に托すバラ露重き

読みⅡとうこうの こにたくすばら つゆおもき

季語Ⅱバラ(夏)

私の時代でも学校の教室に飾る花というのは、子供が適宜家から持って行った。特に花卉作り農家というのは無かったが、農家の庭には何かしら花が咲いているものである。

栄助か、はたまたゆりの発案か、その教室の花に薔薇を切って持たせようというのだから豪勢である。薔薇の株は庭の隅に牡丹と並んでいたような記憶がある。

梅雨の闇おもたし麦の熟る々香に

読みⅡつゆのやみ おもたしむぎの うるるかに

季語Ⅱ梅雨(夏)

麦の熟れる香りとはまた微妙である。梅雨末期、一面の刈り取り間際の麦畑の間の夜道を歩いているのであろう。学校の宿直室で開かれた句会の帰りかもしれない。

その重い香り、いかにも百姓の句である。シテイボーイには作れない。

稚雞がつるむ畑土秋涼し

読みⅡわかどりが つるむはたつち あきすずじ

季語Ⅱ秋涼しⅡ秋冷(秋)

稚雞という言葉は辞書には無いようである。雞は雄鶏のこと。稚には幼いとか若いと言う意味しかないのここでは若い雄鶏のことであろう。つるむとは単に一緒にいるのはなく生殖行為中であるということ。

旱川送り盆供に蠅群る々

読みⅡかわきがわ おくりぼんぐに はえむるる

季語Ⅱ盆供(夏)

お盆の茄子馬など供物は、藤井田圃に下って、黒沢の氏神さんの前辺りに流した。

黒沢は、遙か上流で塩川から分水した農業用水路で、上流の多くの田んぼを潤してくる間に水が固い(少ないⅡ貴重な)藤井田圃では、水位が下がってしまう事は珍しくなかった。

あまりに下がると黒沢からは、取水できないので水が少しでも余っている用水路から動力のポンプで揚水した。この場合、水利権に従って、お金をやりとりしたようである。

学園秋雲うくプール水満てり

読みⅡがくえんあき くもうくぷーる みずみてり

季語Ⅱ秋(秋)

当時の小学校、中学校にはプールなど無かった。近くでは葦崎高等学校にはあったであろう。

秋のプールに水が満たしてあり、それに雲が映っている。防火用水とすするためプールの水は一年中見たしておいたのかもしれない。

大藪鉱泉へ

日雨して温泉の道の花煙草

読みⅡそばえして おんせんのみちの はなたばこ

季語Ⅱ煙草の花(秋)

大藪鉱泉、藪の湯は、武川村から甲斐駒ヶ岳に分け入る途中にある鉱泉で、胃腸に利くとされる。山梨県でも北で西の端に当たり、作物なども家の近所とは違っていて、煙草もあったのであろう。

この時代には古湯小野旅館と元湯鈴木旅館があり、我が家では小野旅館に泊まった。

榮助と藪の湯に行った記憶はないが、好平とはつ、それに泰元とで毎年夏休みの終わりに行った。米味噌から野菜果物お菓子まで背負っての自炊の湯治である。自炊所があり、行商人が来て魚などを買った。道のりは、祖母石に下ってそこで葦崎から大坊に行くバスに乗り、大坊から約一時間歩いて藪の湯まで行くと言う大旅行であった。

現在は鈴木旅館とその縁戚旅館のみ、小野旅館は文字通り跡かたも無い。



温泉の道にて、好平、はつと。昭和32年。良知の後ろは五味正雄氏母堂よどじさん。撮影 泰元 by リコー・フレックス VII

月祀る芋掘ればはや露けくて

読み||つきまつる いもほればはや つゆけくて

季語||月祀る(秋)、芋(秋)、露(秋) ||季重ね

珍しい甲州方言の句。黙榮には甲州方言の句はありそうで少ない。

けけるは標準語で載せる、の意味であるが、一寸高い所に仮に置く、というニュアンスがある。落ちないように縛ったり、押さえたりしたら、けるではない。

この句は五七五全てが季語と動詞で成っている。おそらく野心的実験句であろう。残念ながらあんまり成功とは言えない。又この句は師の有名な句を念頭にしているのは明らかである。

『芋の露連山影を正しゆうす／蛇笏』

この芋の露の句は、蛇笏が生前に蛇笏唯一の句碑を建てた事と認められた句である。龍太亡きあと、句碑嫌いだつた蛇笏の句碑を取上げて建てると言う人はいないだろうから、今後も唯一無二の句碑であることは間違いない。当初甲府の舞鶴城に建てられ、現在は山梨県立文学館に移されている。

秋の蛇およぐ水光美しと見き

読み||あきのへび およぐすいこう はしとみき

季語||秋の蛇(秋)

蛇は夏季であるが、秋の蛇という季語もある。

蛇が鎌首をもたげて泳ぐ姿と云うのはなかなか恰好良いものである。小学校の遠足で行った甲府の武田神社の濠を、蛇が長い距離泳いで行ったのを今でも覚えている。悪戯鬼どもも石を投げるのも忘れて見つめていた。

出水音秋海棠に夕日濃く

読み||でみずおと しゅうかいどうに ゆうひこく

季語||出水(夏)、秋海棠(秋) ||季違い

秋海棠は、亡き我が子謙讓を思い出すと詠んだ花である。

尾花咲き雲綿菓子のごとく照る

読み||おばなさき くもわたがしの ごとくてる

季語||尾花(秋)

秋の晴天、それも安定した高気圧の支配下の晴天の日を思わせる。照る、が利いている。浮き(く)では平々凡々である。

かえりみる秋虹ははやうすれつ々

読み||かえりみる あきにじははや うすれつ々

季語||秋虹(秋)

虹は夏季であるが、秋をつければ秋の季語になる。

朝の虹というのはあまり考えられないので、かえりみている黙榮は西に向かつて歩いているのであろう。すると田んぼ帰りか。

昼湯沸く土間の談話菊の雨

読み||ひるゆわく どまのだんわ きくのあめ

季語||菊(秋)

菊の雨という言葉は無いが、菊の季節の雨と云う意味であろう。

秋の雨、合羽を着て野良に出る必要もない。風呂でも沸かして昼湯に入るか、と云う気分。榮助はあまり風呂好きではなく、ぬるい湯を好んだ。

夕月に今年しまいの野天風呂

読みⅡゆうづきに ことしまいの のてんぶろ
季語Ⅱ夕月(秋)

裏庭にドラム缶の風呂を設営して、夏はそれに入った。飯の屋根は架けてあったが、囲いなど無い。野趣あふれるものであった。このドラム缶風呂設備は数回新調されたようである。

私は高校の時、この風呂でアシナガバチを踏んづけて踵を刺され、アレルギーで頭髮が逆立ち、目が見えなくなるほど腫れ、死にそうになった。

新家婚礼満恵さんとつぎくる

かえり咲く木犀の香にとつぎ来ぬ

読みⅡかえりざく もくせいのかに とつぎきぬ
季語Ⅱ木犀(秋)

良いなあ、黙榮ワールド。

志村富三氏は昭和二十三年春、南方ジャワから帰還、翌二十四年秋、ハケ岳の麓の村、小荒間(こあらま)から満恵さんを娶る。

私の異郷住まいの時、『故郷』のメロデーとともに父母や幼馴染の顔と並んで必ずまなかに浮かんだ「新家のおじさん、おばさん」である。共に榮助、ゆりより若いのに先に逝った。合掌。



麦種子の淨光土に初しぐれ

読み〓むぎたねの じょうこうつちに はつしぐれ

季語〓初時雨 (冬)

麦は小麦か、小麦の粒の薄茶の光に気を止めたものと思われる。

彫り深き貌の夕焼麦を蒔く

読み〓ほりふかき かおのゆうやけ むぎをまく

季語〓麦蒔き (秋)、夕焼 (夏) 〓季違い

謎の句である。彫り深き貌をしているのは誰か。はたまた夕焼け雲の形を彫り深き、と詠んだのか。

好日の峰山茶花に文化の日

読み〓こうじつの みねさぎんかに 文化の日

季語〓文化の日 (秋)、

文化の日は、前年の昭和二十三年に戦前の明治節 (明治天皇誕生日) を受ける形で制定された。従ってこの句の時点では二回目の目新しい祝日であった。

また、制定前の昭和二十二年十一月三日には日本国憲法が公布されている。



庭の山茶花の木。最も平凡な白っぽいピンクの花であるが、でかい木である。山茶花の木に登って遊んだ、と言っても信用して貰えないが、本当に木登り遊びの対象になる。

此の年凶作食調委員として陳情に

《昭和二十四年のこれまでの句では凶作を思わせるようなものは無かったが、暮近くなって深刻な句である。昭和二十四年にはキティ台風が来て東京の住宅地に大被害をもたらした。甲府盆地に大きな台風被害があったという記録は無いが、何らかの要因で凶作であったのだと思われる。》

食調委員は食糧調整委員会委員の事。戦後の食糧難時代、農村に実力以上の食糧供出量が科せられ、赤字供出を強制されたり、逆に供出逃れの食糧隠匿が起きたりした。この調整のため、行政から任命され (後に公選)、供出の調整に当るのが食調委員会である。農村に共産党の影響濃かった時代だけに、供出のノルマ達成の為の行政の手先、スパイとして目の敵にされることも (場所柄によっては) あつたらしい。

この前書きではどこに陳情に行ったのか判らないが、食調委員会は市町村単位だったようなので、おそらく甲府の県庁か食糧事務所であつたと思われる。陳情の内容は、供出量 (決められた量は強制である) の減免であろう。》

陳情の人かげにいて暮早し

読み〓ちんじょうのひとかげにいてくれはやし

季語〓暮早し (冬)

榮助はけっして引つ込み思案ではなかったが、この頃既に耳が遠く、大勢の人が広い所で勝手に喋るような、こういう状況下では、会話に入っていけなかったのではないかと思う。

大石に毒蔓枯る々日のぬくみ

読み〓おおいしに どくづたかるる ひのぬくみ
季語〓枯る(冬)、ぬくみ(春) 〓季違ひ

山離るる満月稲を刈り了る

読み〓やまはなるる まんげついねを かりおわる
季語〓稲刈り(秋)、満月(秋) 〓季重ね

上五の字余りと下五の結びに、ると言う字が三個出て来てリズムを刻んでいる とにかく頑張つて稲刈りを終わらせた安堵感と眺めた満月の様子が目に浮かぶ。

梨大所見

夢多き学徒が憩う芝枯れぬ

読み〓ゆめおおき がくとがいこう しばかれぬ
季語〓枯れ(冬)

梨大は山梨大学の事、山梨師範は戦後、山梨大学教育学部となったので、榮助の母校である。

添乳すや新蕘塚のぬくみ背に

読み〓そえぢすや しんわらつかの ぬくみ背に
季語〓新蕘(秋)

これは、ゆりと良知のことか。蕘塚を作った田んぼは九俵地である。

かたじめる庭掃き冬に入るこころ

読み〓かたじめる にわはきふゆに いるこころ
季語〓冬に入る(冬)



冬支度

はつ(中央で俯いている)
とゆり(白エプロン)が庭で
大根を洗って干している。
勿論、たくあんを漬けるた
めである。
手前に不良品の山があるこ
とから、明野の浅尾辺りの銘
品を買ったのではなく、自家
製の太根であるう。

藪深く仰ぐ大樹の冬西日

読み〓やぶふかく おおぐたいじゆの ふゆにしび
季語〓冬(冬)



堰の瀨冬三竿の日は風ぎぬ

読み〓せきのとろ ふゆさんかんの ひがなぎぬ
季語〓冬の日(冬)

堰とは農業用水のこと。瀨は流れが緩い部分をいう。竿三本分もある高い位置の日も、何もかもが風いでいる。

たまく上京二句

心足り帰郷の駅路既已に冬

読み〓こころたり ききようのえきろ すでにふゆ
季語〓冬(冬)

東京での用事は何か判らないが、うまく行ったようである。

当時、中央線は全て鈍行と呼ばれた各駅停車の普通列車で、新宿から甲府までは電化されていたが、甲府からは電化もされていなかった。

新宿駅から葦崎までは、甲府で電気機関車から蒸気機関車への交替があり、片道四時間かかった。

旅客列車の一部がディーゼル機関車化されたのは昭和三十三年であったが(父親が鉄道員の同級生が、機関車の形式名を知っていて自慢していたのを覚えている)、昭和四十年頃でも一部の旅客列車は蒸気機関車、それもD51が牽いていた。

古本の岩波文庫寒き汽車

読み〓ふるほんの いわなみぶんこ さむききしや
季語〓寒き(冬)

榮助は神田の古本屋街の事を知ってはいたが、行った事があるかどうかは判らない。後にそこに私が足しげく通うようになった頃、「昔だったら、古本なんちゅうは、肺病がおっかなくてなあ」と云う意味の事を言った。

まだ戦後の様相なり

荒れホームすささべる顔を並めて冬

読み||あれほーむ すささるかおを なめてふゆ

季語||冬(冬)

なかなか凄い句である。各駅停車の鈍行に乗っているので、停車する列車からホームの様子は良く判る。ホームで車を待つ人の顔がゆっくりと車窓に流れていく。

霜解けや刈る杉垣の強き香ザ

読み||ゆきどけや かるすぎがきの つよきかざ

季語||霜解け(冬)

表の杉の生け垣の手入れをしている様子である。杉の生け垣は今でも残っているが、この句の当時は、現在ブロック塀化されている部分も生け垣で、高さもずっと高いものであった。生け垣は正月仕度の一環として暮れに刈り込んだ。確かに刈り込み作業中や刈った直後は杉の良い香りがする。

香と云う字に、確信的にザと片仮名で送り仮名がふってあるが、その意味が判らない。

調べてみても日本語の「ぎ」一文字での使用は名詞を除くと、「知らざあ言って聞かせやしよう」のように打ち消しの仮定での用法位しかないようである。

榮助に訊ねても「おまん、ほんなこんもわからんだか」と声が聞こえようである。

片倉製糸所見

厨婦踏む莖の大桶日がつまる

読み||ちゆうふふむ くきのおおおけ ひがつまる

季語||莖、莖の大桶(冬)



の部分が正確に読めないが、莖の旧字の莖と読んだ。

現在で言う社員食堂の厨房の様子であろう。莖とは莖漬けの事で、大根や蕪を葉っぱごと塩で漬けこみ、重しをして発酵させた漬物で、これを漬けこむ様子が冬の季語になっている。当時の片倉製糸の社員食堂ではこうした漬物を自家で漬けていたのである。製糸所の見学に行つて面白い所に目を付けたものである。

昭和二十四年終り